

御影石

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

世界が評価する庭

まだ寒い日の続く二月のことである。NHKスペシャル「驚異の庭園」美を追い求める庭師たちの四季」という番組を見た。そこでの主

評価されるというのだ。このアメリカの日本庭園専門誌は「数寄屋リビング・マガジン／ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデンング(Sukiyā Living Magazine: The Journal of Japanese Gardening)」という隔月刊誌である。

一九九八年に創刊されて、英語圏を中心とする世界三七カ国の人々が定期購読しているらしい(足立美術館HPによる)。その雑誌が毎年発表している日本の庭ランキングにおいて、足立美術館の庭は、これもまた驚くべきことに、二年連続で日本一に選ばれ、その二年目に向けた庭師の行き届いた仕事ぶりに

フォーカスをあてたのが冒頭の番組だったのだ。ちなみに、二〇二三年のランキングで足立美術館に続いたのは、二位桂離宮(京都府)、三位山本亭(東京都)、四位皆美館(島根県)、五位庭園の宿石亭(広島県)だった。海外の愛好家たちのレベルの高さと熱心さにはただただ脱帽である。

来市)の庭師たちの厳しい仕事ぶりには圧倒された。が、もつと私を驚かせたのは、毎年日本の庭に順位を付けるアメリカの雑誌と、その順位付けに投票という形で貢献する世界中の数寄屋文化愛好家の存在であった。その世界中の愛好家たちが投票する対象は、日本にある約千カ所もの庭であり、去年でも一昨年でもない今年のそれぞれの庭の状態が

「数寄屋」という語をタイトルに冠しながらも、ここまで庭に力を入れているあたり、日本文化に対する深い理解と愛情の証としか言いようがない。庭のような外部空間と建物の内部空間の関係、そして外部空間の構成そのもの。そこにこそ日本建

そして、この雑誌。建物を意味する「数寄屋」という語をタイトルに冠しながらも、ここまで庭に力を入れているあたり、日本文化に対する深い理解と愛情の証としか言いようがない。庭のような外部空間と建物の内部空間の関係、そして外部空間の構成そのもの。そこにこそ日本建

築の大きな特長があることを海外の数寄屋愛好家たちはよくご存知なのだ。

緑と石の風情

さて、私事で恐縮だが、四月号でご報告したように昨年度末に神戸に引越した。そして、居住地として選んだのは神戸市の御影というエリアである。

昔からお屋敷町として知られるエリアだが、かつてのお屋敷の所有を継続し維持するのはなかなか大変なことなのだろう。既に多くが姿を消し、マンションなどに建て替わっている。かく言う私が借りたのも、そうしたマンションの一部屋。引越しの折には、丁度向かいの、戦前から建っていたであろう洋風のお宅が解体され始めたところだった。

ただ、近所を散歩してみると、お屋敷は随分減ってしまったものの、どこかかつてのお屋敷町の風情が残っている。何故なのだろうと思っていたが、二度目の散歩ではたとえ付いた。お屋敷の、まさに外部空間



木立と御影石(公益財団法人香雪美術館、重要文化財 旧村山家住宅・洋館 ※現在は非公開)

の構成がものを言っているのである。

今もなお継承されているお屋敷の庭木は、道行く人にとっても十分に見応えのある有難い緑になっているし、この地に由来する御影石の石垣は、部分的にであれ、建て替わったマンションなどの外構に引き継がれているケースが少なくない。

これは、お屋敷がそのまま残されている例だが、香雪美術館(御影・現在長期休館中)の写真を載せさ

せていただいた。それこそ近代の数寄者に名を連ねる、朝日新聞の創刊者、村山龍平のお屋敷であった敷地と建物を使った美術館であり、そのなかの旧村山家住宅は重要文化財に指定されている。

村山龍平がここに屋敷を構えたのは明治時代後半。この辺りにはまだ誰も住宅を構えていない時期だったらしいが、多くの長者たちが村山の後に続いた結果、お屋敷町が形成されたという。(https://

www.koseisu-museum.or.jp/nikage/bunkazai/index/hnml) いわば、このお屋敷こそが、今にもつながる得も言われぬ風情の遺産子になったのである。

土木と建築とで

この町の風情を醸し出す外部空間の緑や石、そしてそれらの構成。ここは一般的な大学だと、土木も建築も扱っていないところである。

かつて東京大学で社会基盤学専攻、建築学専攻、都市工学専攻の三専攻がタッグを組み、大型の研究教育予算を獲得したことがあったが、その折に飲み屋でよく話していたのが、まさにここまでお話ししてきた外部空間の構成を専門に扱う共通講座ができれば良いなという願望についてである。その後、この願望は「ランドスケープ・デザイン」の講座新設という形で部分的にかなったのだが、この分野での土木と建築の協調は、今の時代には一層求められていると思う。